

開催報告

GPAI 仕事の未来：Future of Work Survey Report 2022

日時：2023年3月16日（木） 16:00～18:00

会場：オンラインウェビナー

主催：東京大学未来ビジョン研究センター

2020年6月に設立された GPAI(Global Partnership on AI、AIに関するグローバルパートナーシップ)は、「人間中心」の考えに基づく責任ある AI の開発と使用に取り組む国際的なイニシアティブです。GPAI にはいくつかの作業部会が設置されており、その中には「仕事の未来(Future of Work)」作業部会があります。この作業部会のプロジェクト「職場における事例集(Observation Platform of AI at the Workplace)」の一環として、どのように私たちの働き方が変化していくのかについて国際的なインタビュー調査を世界各国で行っています。本調査のユニークな手法として、未来を担っていく学生達が企業インタビューを行っている点にあります。

本イベントでは、2021年度に続き今年度を実施した調査の概要を紹介し、実際にインタビューに関わった学生の皆さんや教員にご登壇をいただいて、調査から分かった「仕事の未来」や調査法の可能性と課題について議論を行いました。

まず初めの話題提供として、東北大学の原山優子氏より、GPAI と「仕事の未来」作業部会について紹介がありました。原山氏は 2020-2021 年に「仕事の未来」作業部会の共同議長を務められました。GPAI は、G7 の枠組みで「責任ある AI の活用」について議論をするなかで、カナダとフランスのリーダーシップによって始まった活動です。2019年10月にフランスとカナダが共同でグローバルフォーラムを開催したことを発端として、2020年の6月にG7のメンバー国が合意することで正式にスタートしました。創設時にはG7参加国の他、欧州連合とさらに7カ国が参画し、現在は29のメンバー国が参画しています(2022年11月時点)。その特徴は、産官学の様々な分野の専門家が集いマルチステークホルダーによる議論が行われていること、OECDのAI原則をベースとしていること、より実践への落とし込みとその結果をフィードバックする役割を担っていること、等が紹介されました。

その GPAI の作業部会の一つが、「仕事の未来(Future of Work)」です。AI 導入がどのように労働者や労働環境に影響を与えるか、仕事の質や包摂性、健康・安全をどのように守ることができるか、労働者と雇用側の関係性の中でどのようによりよい仕事をデザインしていけるのか、の視点で議論を行っています。現在の重点プロジェクトとして、本日の報告でもある事例収集のプロジェクト「Observation Platform of AI at the Workplace」、とりビングラボの取り組みが紹介されました。

続いて、東京大学未来ビジョン研究センター客員研究員の松本敬史氏が、日本チームの

調査体制と結果の概要について紹介しました。「仕事の未来」日本チームには様々な大学の学生が参加しています。今年の調査には4つの大学(同志社大学、東北大学、東洋大学、香港科技大)から、総勢 36 人の学生がそれぞれの大学のチームの指導教員の先生方のサポートを受けながら参加し、インタビュー調査を実施しました。また、11月のGPAIサミット等では、国やチームを超えた学生同士の交流機会にも積極的に参加をしていただきました。調査の際の質問項目は、GPAI 共通の質問項目をベースに追加項目等も交えたものとなります。実際のインタビューは、調査からインタビュー依頼、質問項目準備まで学生が主体となり、今年度は最終的に19の産業分野で45のAI活用のユースケースについて実施しました。これらのケースを、GPAI で設定した分析軸である「人の代替」「デジタル・コワーカー(労働者と連携)」「自律型サービス」「シミュレーションの可視化」「標準開発ツール・プラットフォーム」に分けてみると、「人の代替」「デジタル・コワーカー(労働者と連携)」に該当するが多くみられるという印象である一方で、香港科技大が調査したケースではインフラ分野で「自律型サービス」にあたるケースもあり、アジアで社会実装が推進されているとの印象が示されました。

学生パネルディスカッションでは、調査に参加した4大学5チームの代表学生が参加し、松本氏の進行で、GPAI 調査への参加を通じて得られた経験や気づきについて意見を交換しました。

まずインタビューした領域におけるAI導入の影響についてそれぞれがコメントしました。介護分野を調査した同志社大学社会学部4年生の齋藤恭寛さんは、AIが、ケアマネジャーを補助的に支援する一方で、地域や個別に必要なサービスについて現場の実情とずれが生じていると述べました。デザイン・制作分野を調査した同志社大学社会学研究科博士課程の王婧瑜さんは、AIにどの部分をどのようなプロセスで担わすか、AIと人間のコミュニケーションの部分のデザインが非常に重要になってくること、今後は仕事とエンターテインメントの領域の境界線がより曖昧化していく印象を持ったと述べました。AI教材の活用現場を調査した東北大学工学研究科修士課程1年生の椎野直さんは、教育現場に起きている変化について、個別学習が可能となることで、個々の生徒に寄り添った指導等の教師に求められるスキルが変化していること、またAI教材を積極的に活用するか否かは、生徒によって個人差があること等が発見であったとコメントしました。東洋大学総合情報学部3年生の木下颯人さんは、IT企業のAI開発・コンサルティング部門へのインタビューを通じて、AIプロジェクトを推進するには、AI技術そのものの知識に加えて導入領域のビジネススキルやコミュニケーションがより重要になること、またそれを含めてかなり高度な人材が求められることを実感したと述べました。サステナビリティ分野を調査した、香港科学技術大学公共経営修士課程修了生の李海玉さんは、インフラ施設の点検サービスの導入事例に触れ、今後産業における人手不足や危険な作業代替の意味でもAI導入が有効であること、また導入にあたっては環境技術やワークフローにどのように組み込むかの専門知識やノウハウが重要であると述べました。

続いて松本氏から、調査した分野で近い将来働くとした場合に、AI とどのように仕事をしたいかとの問いかけがありました。この問いには、上述した調査の気づきを踏まえ、実感のこもったコメントがあがりました。人間にしかできない利用者に寄り添ったコミュニケーションや多様性を尊重した対応に携わること、AI を活用することによって代替できない技術やより高度なスキルを身に付けて臨むこと、また AI システムを使う側・提供する方の調整役として必要な役割を果たしたいといったコメントがありました。また、今後必要な人材像について、リスクリングの重要性や、大学においても広範囲で学部横断的な学習機会がより必要になる点も言及されました。

続いての教員によるパネルディスカッションでは、調査に参加した大学の指導教員が参加し、東京大学未来ビジョン研究センターの江間有沙氏の進行で、扱った事例を踏まえた分析と当調査の意義や今後の展望について議論しました。

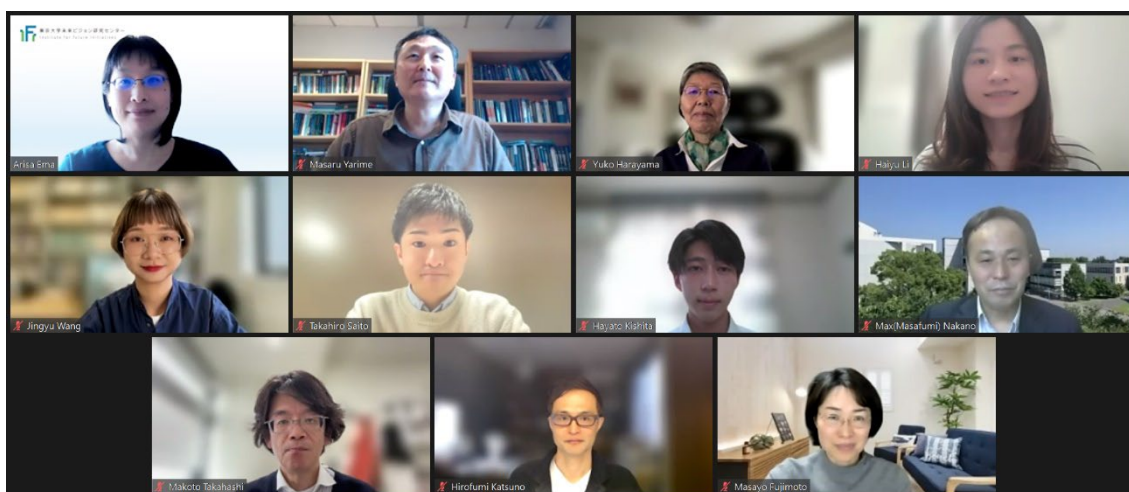
まず初めに、「仕事の未来」について、調査対象とした事例を通じた分析や課題について意見を交換しました。同志社大学社会学部の藤本昌代氏は、社会学ゼミの中で行った調査を振り返り、現場では AI により無くなる仕事と新しく生まれる仕事との新陳代謝が起きていること、医師や研究等の高度な専門職においても多く導入が進められていることがわかったと話されました。一方で、知識労働における若い世代の訓練時間の短さへの中高年の危惧や、DX 作業にも非正規での従事が求められる女性の不安定雇用の存在等にも言及して、労働環境に与える様々な影響について考えさせられる現場の状況があったと述べました。同志社大学社会学部の勝野宏史氏は、調査対象としたクリエイティブ領域の職場に関して、AI が単なるツールというよりも、人間も AI から発想を得るなど、相互により複合的に影響し合うようになるとの印象を持ったと述べ、そのうえで、創造することを通じて人間が感じるやりがいやアイデンティティ形成への影響についても注視していきたいとしました。東北大学大学院工学研究科の高橋信氏は、急速に進化する AI の影響力は不透明な部分があるなかで、教育分野の調査を例にとり、現場の環境は激変しているが、その状況には非常にばらつきがあるということが強く印象に残ったと話されました。東洋大学総合情報学部の中野雅史氏は、監査業界に対して行った調査を振り返り、以前は仕事がなくなる懸念があった業界であるが、むしろ AI の活用によって監査業務のスケールアップや高度化が起これ、雇用の拡大に向かう傾向にもある点を強調しました。香港科技大学公共政策学部の鎗目雅氏は、環境エネルギー、サステナビリティ分野の調査を振り返り、AI の積極導入の方向があるなかで、開発型と利用側の期待値のギャップや、利用側のスキル不足などが課題となっており、それらへの対応策も注目されると述べました。また今回企業の紹介や調整の支援をされた兵庫大学現代ビジネス学部の宮崎光世氏は、当調査に参加した学生の視点からも仕事観の変化が起これつつある点が強調され、今後 AI と人間の仕事が切り分けられ、経営側とスタッフの関係等も変化をしていく中で、人間としてどうしていくかというのを考えることが非常に重要であると述べました。

続いて、今後必要となる調査や分析の視点についても議論しました。調査をするなかで利用者側の倫理的な理解不足が見られたことなどから、倫理の観点が今後も重要な分析視点であることが強調されました。また、ユーザ側も含めた網羅的な調査の実施が課題としてあげられました。さらに、今後AIとのインタラクションが増えてくる中で、技術主導ではなく、先にどのような社会を実現したいかという未来のビジョンを描いたうえで、AIの活用を考えていくといった方向性の議論も必要なのではといった意見がありました。そしてそのためにも、柔軟な思考で組織や制度を変えていけるマインドセットの在り方の調査や、経営者側の視点や意識に着目した調査についての関心も上げられました。また、国際的にガイドラインや原則が生まれているなかで、それらを実際の仕事の現場に落とし込むまでにはまだまだ至っていないという点が指摘され、国や文化の違いを踏まえて、どのようにプラクティスしていくか、また国際的に必要な調整を GPAI のような場を通じてしていければ有意義であるといった意見も出されました。

パネルの最後には、学生を指導する立場から本調査への参加意義について意見を交換しました。開発や社会実装の場をリアルタイムで知ることができ、学生一人一人が今後の未来像を描いていくうえで非常に重要な機会となったこと、インタビュー先の企業とのコミュニケーションを通じて、ビジネスに通用するコミュニケーションスキルを学べる機会しても有意義であった等のお話がありました。また、政策を学ぶ学生が技術の現場に入って調査するなどの観点で、専門分野の垣根を超えたアプローチや学びの場が提供されるという点においても有意義であり、今後のキャリアパスを柔軟に考えるきっかけにもなるとのコメントがありました。さらに、企業側にとっても若い世代の意識や関心を知りうる機会となる点で、この枠組み自体が、双方にとって有意義なものである点も言及されました。

最後に、「仕事の未来」作業部会のプロジェクト「仕事場における事例集(Observation Platform of AI at the workplace)」を全体統括するヤン・ファーガソン氏(トゥールーズ工科大学)より、プロジェクトの概略と日本調査へのコメントをいただきました。人間にとって「仕事(働くこと)」は、個性や人生観にも深くつながっています。テクノロジーやエコロジーとの関わりのなかで新しい時代を生きているとの認識が示され、OECD 原則に沿った検討、またAIと仕事の関係性について具体的なシナリオをイメージしながら検討を進めることの重要性が示されました。そのシナリオには、「労働者がAIに置き換えられる」「労働者がAIに支配される」「労働者が分断される」「労働者の能力が増強される」「労働者が人間らしさを取り戻す」などがあり得ますが、どのような未来を築いていきたいかということを考えていく必要があります。「Observation Platform of AI at the workplace」における調査は、2020年から開始して現在140のユースケースを収集しています。毎年質問内容を改善して調査を継続しており、学生コミュニティをヨーロッパ・カナダと日本に続き、米国でも創設しようとしており、プロジェクトの重要な推進力となっているとして日本の学生の貢献をたたえました。

閉会の挨拶は総務省国際戦略局情報通信政策総合研究官の飯田陽一氏からいただきました。日本政府は、2015年頃から第3次AIブームに合わせてAI原則の検討をし、国際的にもAI原則の議論を提唱しリードしました。AIを、イノベーションを創出して人間の社会を豊かにするために使っていくためには、その前提としてAIに対するトラストの形成が必要になるという課題意識があります。原則の実践にはEUで議論されている法規制や、日本におけるソフトロー的な手法など、国や文化によって様々なアプローチがある一方で、AIやデータは勝手に国を超えてしまうものです。そのため、AIのガバナンスのしくみが国境を超えても相互に理解可能となることをいかに担保するかを考えていく必要があります。このことは今年のG7の重要議題にあがっています。GPAIが担っている実際の現場の実例を示しながらのフィードバックは大変有意義であり、日本と海外の共通点や違いを見出していく本調査は大変価値があるとのコメントをいただきました。また今秋に政府がホストする国連の『インターネット・ガバナンス・フォーラム』でもAIが重要議題の一つになっていることに触れ、このような場でも日本の学生の積極的な国際発信への期待が示され、イベントが締めくくられました。



(上段左から) 江間氏、鎗目氏、原山氏、李氏
(中段左から) 王氏、齋藤氏、木下氏、中野氏
(下段左から) 高橋氏、勝野氏、藤本氏